



ニッポンの材産

長野県 飯山市

紙

松井郁夫 (文と絵)

1955年生まれ。東京芸術大学大学院美術研究科修了。一級建築士。松井郁夫建築設計事務所を主宰。金沢美術工芸大学講師、大工育成塾講師。

住宅の素材=建材というと、工業製品や輸入素材を思い浮かべる。しかし、日本の建築を支えてきたのは国内各地で生産される伝統的素材だったはずだ。これら日本の伝統建築素材を「ニッポンの材産」と題して、その産地と生産者を訪ねていきたい。訪ねるのは国産材を生かした木組み工法を駆使した住宅建築を手がける建築家の松井郁夫さん。訪ねた先は長野県飯山市の「内山紙」。地元産の楮を雪に晒して、障子紙などを手漉きする工程を見せていただいた。

楮

こうぞ

刈り取った楮は、樹皮をむきとり、その樹皮を軒下につるして乾燥させる。この後雪に晒して漂白をする。

のめされたが、確かに雪の中に晒されているのは紙の原料である。ここからは阿部さんのご説明であるが、「内山紙」は100%、楮と呼ばれる一年生の植物の繊維から出来ているそう。楮は和紙原料の中で最もしなやかで強靱かつ通気性、保湿性に優れているという。そのために障子紙に最適で日にも焼けない。

紙漉きは、もとは雪に囲まれる農家の冬の収入源だったという。田畑の脇に自生した楮を使い、雪の中で太陽の光に当たると雪解けの際に発生するオゾンの漂白効果で、楮の皮が白くなることを活かして雪晒しが始まった。

阿部さんが手にした楮の皮は、よくみると太陽光に晒された表面部分が白くなっている。楮の雪さらしは、雪の降った翌日に家族総出で作業する。時折ひっくり返ししながら、雪の中に一週間ほど放置すると全体に白くなるのだそう。

阿部さんいわく「内山紙」は障子に貼ってからも日に日に白くなるという。そんなことがあるのだろうか？そこで早速、工房の隣に建つご実家の障子紙を見せていただくことになった。座敷に通されて、内山紙の雪見障子を見た。張り替えてから3年目という障子の色は、日差しの入る逆光で見ると、白の中にほかに晒された楮の繊維の色が感じられる。いわゆる漂白された白さではない天然素材の白さである。



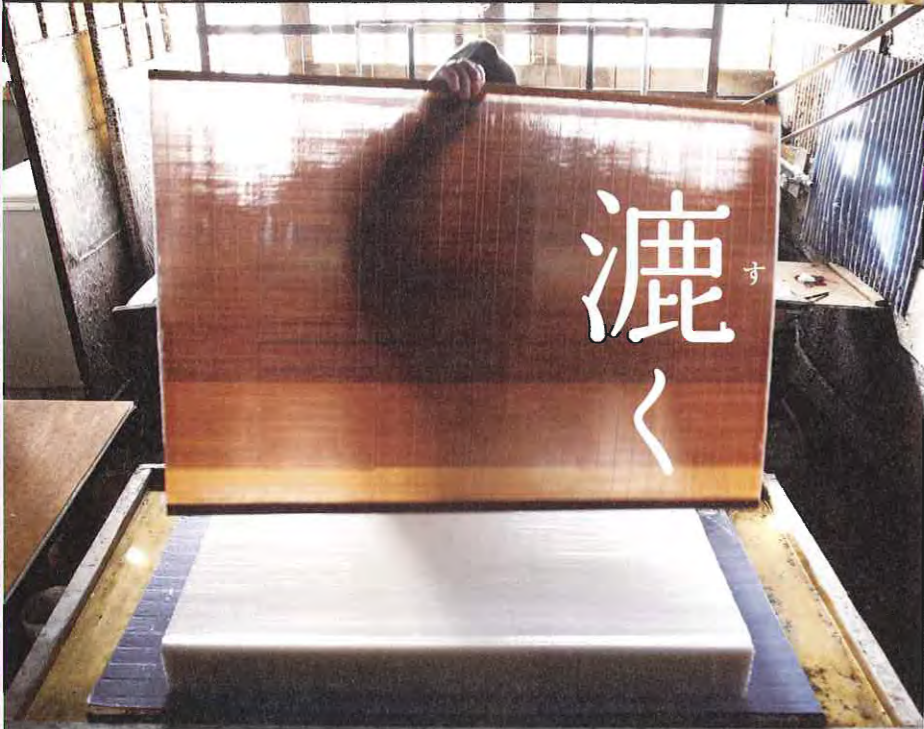
「雪に晒して白くする紙がある。」そんな不思議な話を聞いて興味津々、珍しいもの見たさの旅に出た。目指すは長野県の北端、千曲川のほとりに広がる飯山市内の雪の中である。映画「阿弥陀堂だより」の舞台にもなった美しい風景の中にその紙の秘密があるようだ。長野駅から飯山線に乗り換えて一時間。千曲川の流れに沿って、山沿いを新潟方面へと向かう。車窓から白く輝く雪景色を見ながら、戸狩野沢温泉駅に到着。雪晒しの紙は「内山紙」と呼ばれる手漉き和紙である。天気は快晴、雪晒しには最高の天候といわれている。

駅からタクシーで内山紙協同組合の理事長で伝統工芸士でもある阿部一義さんの工房に着く。雪景色の広がる斜面の腹に工房があり、周り一面の雪である。到着早々に雪晒しの光景を見せてもらえるという。

外は、まぶしいほどの太陽。目にするのは白い雪に白い紙だろうと、こちらは勝手に雪の中に白い紙が晒されている白一色の風景を想像してきたが、実際はそうではなかった……。

雪に晒されていたのは、黒っぽいひものような、わらのような植物らしきもの？である。畑の畝のような雪の中に半分埋もれている。それは楮という植物の皮であった。想定外の光景に軽く打ち

写真：成清徹也 ●このテーマの放送はありません。



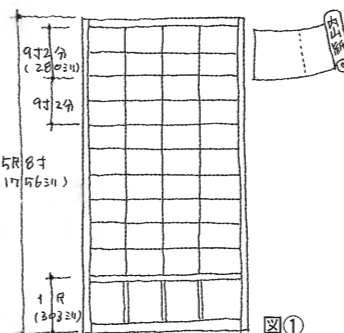
楮の皮を煮て、繊維を取り出す。紙漉きの前には細かい作業が幾重にも積み重なっている。



小林文四郎さん。左は自宅の漉き場で作業中の小林さん。



内山紙協同組合理事長の阿部一義さん



雪上に広げた楮に雪をかける。毎日雪をかけ、大雪の日には取り込む繰り返し。



雪晒し途中の楮の樹皮。白っぽくなっているところが漂白された部分。1週間ほど晒してさらに白くする。

晒す

雪見障子の下の組子に貼った紙は、楮の繊維と黒皮を漉き込んだという野趣にあふれる漉き方となっている。上の段には内山紙のロールを障子の棧(組子)ごとに横に張り込んである。よく見ると紙の継ぎ目が上下の段でずれていて石垣をつんだ模様のように見える。この張り方を石垣張りという。機械で造られた一枚漉きの障子紙に慣らされた目には、この紙の継ぎ目が気になるが、この継ぎ目があることが手漉き紙の証拠なのだ！実は、本式の茶室の障子には、この継ぎ目のある手漉きの障子が必修である。茶人は本来、面白いものとか趣のある風情を好むのである。

ちなみに読者の皆さんは、障子紙の幅に決まりごとがあることをご存知だろうか？実は昔から障子紙の幅の寸法は9寸2分と決まっている。8寸3分や5分もあるが、一般には9寸2分(約280ミリ)である。この寸法は建具である障子の組子の間隔と同じ幅に揃っていて、障子紙にとっても建具にとっても無駄のない寸法なのである。

日本家屋の建具の内法が5尺8寸(約1756ミリ)であった頃、障子には約一尺(303ミリ)の腰板があり、組子は9本と決まっていた。この間隔で建具を造れば組子の一本置き寸法は約9寸2分となり、障子紙のロールが一本19メートルで障子が4本貼れたという。さらに19メートルのロールは2尺×3尺の手

漉き紙を4枚に切ってそれを48枚つなぎ張り合わせてつくるという。手漉き紙は無駄なく使い切る、すばらしい寸法体系ではないか。伝統的な日本家屋の寸法体系は、障子紙の寸法までも体系化していたという優れた事例である。(図①)

次に手漉きの職人さんを訪ねた。飯山の里を千曲川を背に瑞穂村に向かって阿弥陀堂のお膝元近くまで登ると、そこに小林文四郎さんの紙漉き場がある。道に面した古い土蔵の軒先には楮が干してある。土壁の色と楮の皮の色が実にのどかな風景を創っている。土蔵の奥の、川端に紙漉きの水音がある。小林さんの紙漉き場は驚くほど小さい。

建物は年季が入って小さいが、中は小林さん夫妻が、楮の煮炊きから紙漉き、鉄板乾燥までの全てをこなす立派な工場だ。小柄な文四郎さんは73歳。この道53年のベテランだ。今も一日200枚の紙を漉くと言う。この仕事を始めた頃は飯山にも45軒ほどの手漉きの家があったが今は7軒しかないという。後継者もいないと嘆く顔には深いしわが刻まれている。それでも話し振りは屈託がなく悲壮感もない。

飯山ばかりでなく、このような大自然を生かした、日本の伝統的な美しい工芸品をつくる産地が、今さまざまな理由でどこも危機に瀕している。このままでは日本の伝統文化が、誰知れず静かに消えていくばかりであろう。現代日本のものづくりの厳しい現実を目の当たりにした気がする。

帰りの車窓から阿部さんが雪の中の一隅を指差して「あれが楮の株ですよ」と教えてくれた。そこには段々畑の自然石の石積みの隙間から、根を張ってじつと冬の寒さと雪の重みに耐えている、楮の切り株がひとつひとつと頭を突き出していた。この切り株から春になると、また楮の茎が3メートルもの長さに伸びるのだという。春が待ち遠しい飯山に、昔から自生する楮の力強い命をあらためて感じながら帰路についた。